

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21402039

研究課題名（和文）ラテンアメリカ日系人のパーソナリティと志に関する研究
～日本の若者の志希薄化の検討

研究課題名（英文）The Investigation on Personality and Aspirations of Nikkei People
in Latin America – Focusing on Low Aspirations of Japanese Young People

研究代表者

角川 雅樹（TSUNOKAWA MASAKI）

東海大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：90188607

研究成果の概要（和文）：ラテンアメリカ日系人における、パーソナリティと上昇志向に関する調査を、メキシコ、アルゼンチン、ブラジルにおいて実施した。目的は、現代日本の若者の低い上昇志向、すなわち、志が希薄である点について検討することであるが、これは、現代日本の時代精神と関係がある点について、100年前に海外移民として現地に渡った日本人の背後に存した、明治の時代精神と比較しつつ検討、考察した。

研究成果の概要（英文）：The author investigated on the personality and higher aspirations of Nikkei people in Mexico, Argentina and Brazil. The purpose consists in clarifying the low aspirations of modern Japanese young people. Comparing the national mentality of modern Japan with the mentality of Meiji Era exactly when Japanese started to emigrate to Latin America. The author concluded that the mentality of this era has influenced greatly on the personality and psychology of young people in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	4,500,000	1,350,000	5,850,000

研究分野：臨床心理学、スペイン語学

科研費の分科・細目：社会科学D・臨床心理学

キーワード：ラテンアメリカ、日系人、日本の若者

1. 研究開始当初の背景

筆者は学生時代にメキシコ国立自治大学に留学したのを皮切りに、その後、メキシコに通算5年ほど居住し、その間、一般のメキシコ人やメキシコ日系人との広範な人間関係を確立してきた。

日系人との接触を通じて、日本人との共通点や相違点について考える機会を多く持ったことにより、「日系人とは何か」、ひいては「日本人とは何か」という問題意識が徐々に

筆者の中に醸成されてきた。その後、メキシコのみならず、アルゼンチンやブラジル等に出向く機会があり、広くラテンアメリカ日系人について、そのパーソナリティと心理に強い関心を抱くに至った。

日系人と日本人の共通点も多い中で、しだいに相違点について関心を持ち、これまでなされている諸研究について検討、同時に、ラテンアメリカの現地の人々、すなわち、メキシコ人、アルゼンチン人等についても考え

るをえなかった。

一方で、現代日本における若者のパーソナリティや心理傾向にも、大学生と日常的に接する中で、強い関心を抱き、しばしばラテンアメリカに出向いた時に、現地日系の若者と現代日本の若者の違いを痛感しつつ、両者を心理学的視点から比較して検討することは、有意義であると思うようになった。

その思いが本調査研究の動機であるが、文献や他の調査研究をあたってみる中で、意外に、この問題意識はこれまであまり持たれた形跡がないことが明らかになり、調査の重要性を痛感している。

2. 研究の目的

およそ100年前の時代、すなわち、明治の幕開けの時期、神経衰弱と呼ばれる症状が日本全国でみられ、精神科医、森田正馬はそれを「神経質」として概念化、広範な治療実践の結果、1920年頃その治療法は完成し、今日それは「森田療法」と呼ばれている。森田自身が、若い頃神経質症状に悩まされ、その青年期を過したが、自分の経験を生かし理論化を進め、結果的に、独自の治療観と方法論に基づく療法を考案するに至った。

他方、やはり100年ほど前、明治元年から日本人海外移民はスタートしたが、ラテンアメリカへは、その後、榎本武揚が推進したいわゆる「榎本移民」として、1898年、メキシコへの移民が開始された。以後、笠戸丸によるブラジル移民と、その一部の人々のアルゼンチンへの渡航があり、次第に、他のラテンアメリカ諸国への移民が進められていった。現代では、1世移民の子孫である、主に2/3/4世が、現地において「日系人」として生活しており、また、現代の日本には、30万人近くの日系人が居住する事態となっている。

メキシコ、アルゼンチン、ブラジルにおいて、現地の精神保健専門家と日系人を対象として、それぞれの国で複数回実施してきた、スペイン語による「森田療法セミナー」や講演会を通じた実践活動から、しだいに明らかになってきたことは、現代日系人のパーソナリティとして、上記の神経質的性格傾向がみられ、几帳面で上昇志向が強い面があるという点であった。

筆者の基本的発想として、「神経質」は「明治の時代精神」と密接に関係している。森田正馬を含め、明治期の知識人や一般庶民にみられた、精神科的問題や症状としての「神経衰弱」と、その心理である「神経質傾向」は、幕末/明治の「時代不安」と直結しており、その「不安」の具体的経過が上記の「症状」にほかならない。

当時の人々の心理的傾向や社会現象としての「神経衰弱」は、明治期の「故郷に錦を飾る」という強い意志を背景に持つ、日本人

海外移民の精神的傾向と無関係ではなく、日系移民1世はいわば当時の時代精神を体現した人々であり、その精神は、幕末/明治の西洋との出会いに基づく、「衝撃」に起因する「対西洋不安」と密接に関わるものである。

さて、現代の日本では、若者の無気力傾向や上昇志向が希薄な点が、他の研究者らによっても指摘されている。日本青少年研究所により近年実施された調査では、日本の青少年では、「偉くなりたい」と思っている人が、アメリカ、中国、韓国と比較すると、その割合が格段に低く、上記3ヶ国の実に3分の1にすぎないという。この点は、すでに述べた、明治期の強い上昇志向や海外雄飛の背後にある、「志」のある姿勢と対照的な面がある。幕末の僧、月性によるとされる、「男児志を立てて郷関をいず、学もしならずんば、死すとも帰らず」などの、いわゆる「青雲の志」と、現代日本の若者の心理状況は、対極にあるとみるのが可能であろう。

本調査研究では、日系と日本の若者を比較することにより、日本の若者の「志」の低さの原因を明らかにすることを通じて、今後の青少年教育の方向についての、示唆を得ることを目的としている。

3. 研究の方法

今回の調査では、ラテンアメリカ諸国の中から、筆者が日系社会とすでに緊密な関係を確立している、メキシコ、アルゼンチン、ブラジルの3ヶ国を選び、調査対象とした。メキシコはすでに触れたように、筆者が青年期に長期間生活した国であり、アルゼンチンとブラジルは、近年接触を深め、やはり、緊密な関係を保っている国であるため、日系人に関する調査にはこの3ヶ国が最も適切と思われる。メキシコが日本に最も近い国であるが、アルゼンチンとブラジルは地球のほぼ裏側にあり、メキシコへ行くルートの延長線上にある点が、調査には好都合であった。

メキシコはアメリカの隣であり、政治的、経済的影響が強く、他の二国とはやや異なる面がある。アルゼンチンはメキシコ同様、スペイン語圏である一方で、ブラジルはポルトガル語が国語であるなど、共通面と相違面がそれぞれにあるものの、この三国はラテンアメリカとして括ることができる。したがって、例えば、アルゼンチンとウルグアイといった選択だと、類似面の方が大きく、かえって今回のような調査には不向きな面があると思われる。類似性の中に相違性を含む、今回のような対象国の選択が最も適切と考えられた。

当初の計画では、政治経済状況、あるいは、自然現象に関わる、不測の事態も想定し、最悪の場合は2ヶ国でも調査を完結できるように考え、広めに上記の3ヶ国を設定したが、この考えは結果的に正しかった。というのは、

調査初年度の4月にはメキシコで豚インフルエンザが勃発、調査も危ぶまれる事態となった。さらに、2年目には、世界同時不況が発生し、いずれの国においても経済面の不穏事態から、大なり小なり政治的混乱状況に至ったが、特にアルゼンチンで大きな混乱状態が出現した。また、ブエノスアイレスの都心部でデング熱が蔓延し、それが2年間続いたなど、不測の事態がいくつも発生、結局、最初の2年間はアルゼンチンでの調査をみあわせざるをえなかった。

世界同時不況も落ち着きをみせた3年目には日本で東日本大震災に続く、津波と放射能漏れの事態が出現し、次から次と異なった状況が発生、その都度、急遽予定を再検討する必要に迫られた。この状況において、やはり、当初に3ヶ国を設定したのは適切な計画だったことを痛感した。これらの状況の変化に即して、最初の2年間にメキシコとブラジルを中心に調査し、3年目と4年目にアルゼンチンに集中することができたのは幸いであった。

したがって、当初の計画どおり、メキシコ、アルゼンチン、ブラジルにおいて、現地日系人を対象に調査ができ、後に述べる、資料の均等化を達成するに至った。

なお、ブラジルはポルトガル語であり、メキシコとアルゼンチンはスペイン語が国語であるが、両言語は、フランス語やイタリア語とともに、もともとラテン語から派生した言語であり、特にスペイン語とポルトガル語は共通性が高く、お互いの言語を知らなくとも大枠の理解が可能である。筆者はポルトガル語の知識はあまりないが、ブラジルやポルトガルへ行っても、コミュニケーション上の問題はなく、ちなみに、ブラジルでは、精神保健の専門家むけに、森田療法についてのセミナーや講演会を、スペイン語で実施したほどである。

以上の理由から、日系人対象の面接調査は筆者自身が、いずれの国においてもスペイン語で実施した。一方で、MMPI という心理/パーソナリティ検査は、もともとアメリカのミネソタ大学で開発されたものだが、すでに世界の主要国において、翻訳標準化がなされており、上記のいずれの国にても活用されている。筆者自身、メキシコ国立自治大学の研究員として1年間同大学医学部に所属し、メキシコ人専門家とともにMMPI を活用し、共同調査にも加わった経緯がある。また、日本でもこれまでその日本語版を活用してきているので、筆者にとってはもったもなじみのある心理検査といつてよい。なお、ブラジルのポルトガル語版は、以前、ブラジル心理学会の好意により、無償で提供していただいたものがあり、それを今回も現地で活用した。スペイン語版はスペインに先駆け、最初のス

ペイン語版がメキシコ国立自治大学で翻訳標準化されたという経緯があり、現地専門家も頻繁に活用している、信頼性の高い心理検査のひとつである。

4. 研究成果

すでに述べた、国際的諸事情のため、紆余曲折はあったものの、最終年度において、資料の均等化を達成することができた。すなわち、上記3ヶ国の調査資料について、調査対象の人数、および男女数の均等化が得られたのは幸いであった。

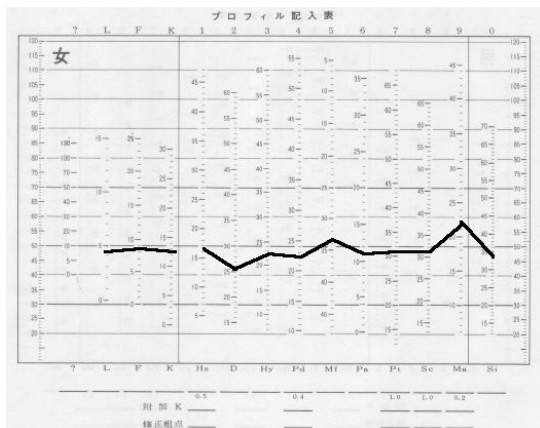
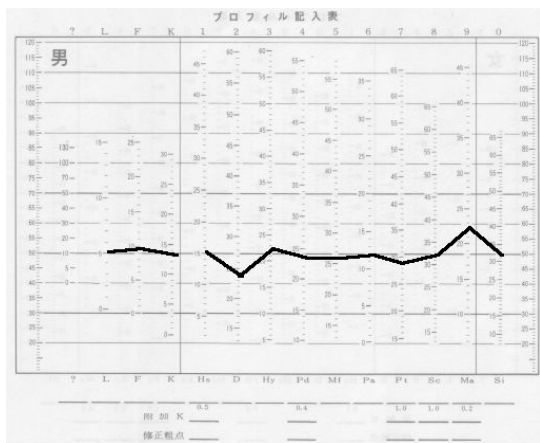
メキシコでは、男性33名、女性30名、アルゼンチンでは、男性25名、女性27名、ブラジルでは、男性23名、女性28名となり、特に、男女性間の数量的バランスを達成できた点、当初の計画どおりとなった。統計調査の面ではこのことが最重要であったが、この資料を基礎として、3ヶ国間の比較と、男女間の比較、その後、日本人資料との比較を行ない、また、面接資料の検討を統計資料に基づいて、進めることになった。最終年度まで統計資料が数量的に揃わなかったため、最終年度を待って統計面の検討をするに至り、それまでの年度では、主に面接資料の充実と整理、検討が、現地と日本における作業の中心であった。

さて、統計調査の結果として、上記3ヶ国間の差は、日本との差と比べて、大きな違いはみられず、むしろ、当初の予想どおり、日系人と日本人との間に顕著な有意差がみられた点が、最初の発想からすると、本調査研究では肝要な点であったが、結果はそれが浮き彫りとなった。MMPI という心理検査では、妥当性尺度と呼ばれる、最終的検査結果が信頼できるかどうかを検知する尺度が組み込まれており、その結果を見た上で、臨床尺度という各尺度の最終結果を見ていくかたちになっている。日系人の場合、いずれのケースでも妥当性尺度は信頼できるレベルにあるという結果であった。これは、日系の人々が調査に対して、積極的、自発的に参加したことを示しており、このことじたいに意味があると考えられる。面接調査でも、日系人には自分とは何かという問題意識がふだんから潜在しているため、調査に対して意欲的に対応する傾向がある。これは日本人に同じ調査を実施しても、基本的にみられない点であり、その違いには印象的なものがあった。

さて、MMPI では、臨床尺度は10の尺度から成っていて、各尺度は精神科の主要な病理に対応しており、例えば「鬱病」「躁病」「統合失調症」「ヒステリー」「パラノイア」等といった古典的な病理との関係から、受検者の傾向や状態を判断していく方式が基本にある。したがって、例えば、「統合失調症」尺度の値により、そのパーソナリティタイプが、

どの程度受検者にみられるかという点は、本調査研究には直接参考にならない側面であり、その尺度の値を考慮する必要はないと考えられる。本調査では「志」に関わる点を検討することが主旨であるため、MMPI 各尺度の中から、その点に関連する尺度として、特に「鬱尺度」と「躁尺度」が有用であるとの基本的発想に基づき、日系人と日本人における上記2尺度の結果についてのみ検討することをもともと計画していた。

MMPI では全尺度についてのプロフィールが最終的に得られるので、以下に、日系人のプロフィールを掲載するものの、その中の「鬱尺度」と「躁尺度」に焦点をあてて解釈していく必要がある。以下に日系人大学生のプロフィールを男女別に提示してあるが、これはメキシコ、アルゼンチン、ブラジルの調査結果を総合したものである。



左側の3尺度が妥当性尺度であり、右側の10尺度が臨床尺度で、プロフィールのフォーマットは日本人の標準値に準拠しており、日系人プロフィール近くの水平線が、日本人の標準値として設定されている。日本人大学生の標準値も水平線に近いところで上下しており、日系人と日本人大学生を掲載すると見にくいので、ここでは日系人のプロフィールのみを載せてある。

さて、きわめて印象的な点は、男女ともに、

各尺度の中で最も低いところに位置しているのが「鬱尺度/Depression」であり、右側の最も高いところに位置するのが「躁尺度/Manie」にほかならない。その他の尺度はだいたい日本人の標準線や日本人大学生の平均値とあまり変わらないにもかかわらず、上記2尺度のみが大きく異なった様相を呈しており、いずれも、日本人標準や日本人大学生平均との間に、顕著な有意差がある点が重要なポイントといえる。

これが何を意味するかということになるが、「鬱尺度」と「躁尺度」は、「躁鬱病」という病名からも分かるように、相互に逆の関係にある。「鬱」の様相を呈するときには、「躁」の様相が消え、「躁」の様相を呈する時には「鬱」の様相が消えるのが普通である。したがって、日系人のこのプロフィールはきわめてノーマルな状況を示しており、「躁的」傾向が強く、「鬱」的傾向が弱いという点で、相互に矛盾がない状況にあることが分かる。

ここで「躁」的とはどういうことかといえ、MMPIにおける「躁尺度」は、英語でいえば、Aspirationsが高いということを示しており、正常圏においてある程度この尺度の値が高い場合は、「躁」的という表現よりも、むしろ、「意欲的」「積極的」「野心的」といった形容がむしろ適切であって、「上昇志向」が強いという、むしろ人間としてプラスの面を示している。

一方で、日本人大学生の場合は現代日本人の標準線近くに位置しており、その点で現代の日本人の傾向と一致していることになり、そのことじたいにも興味深い面がある。しかし、日系人大学生の場合は、それと大きく異なり、現代の日本人一般や、日本人大学生よりも、はるかに意欲が強く、積極的で、野心的、上昇志向が強いことがプロフィールから理解できる。これを「鬱」尺度の方向からいえば、鬱的でなく、無気力でなく、落ち込む傾向が少なく、引きこもらず、といった形容が妥当する。

さて、本調査研究の主題は「ラテンアメリカ日系人のパーソナリティと志に関する研究」であり、副題は「日本の若者の志希薄化の検討」であった。筆者はもともとこの問題意識で調査を計画したのであるが、実際の調査結果がこれほど鮮明に出ることは予測していなかった。当初はそれまでの日系人との接触を通じて、何となく日系人が意欲的、積極的である点に関心を抱いたことから問題意識が徐々に醸成されていったが、実施に調査してみると、日系人のその傾向がよく分かり、納得がいく面が多分にあった。

以上、統計調査からみた本調査研究の結果の中心的部分について紹介したが、以下において、同時に実施してきた面接調査の結果に

ついて述べ、統計面と面接面を総合して提示、紹介していくことにしたい。

筆者の考え、本調査研究の結論的なところから述べるならば、上記の、ラテアメリカ日系人の心理的傾向とパーソナリティの特徴は、明治の時代精神と密接に関係している。西洋との邂逅に伴う「衝撃」、その結果、幕末/明治の日本人が抱いた「不安」は、当然の帰結として、心理的に生き延びようとする、強い志向性を生み出した。すでに触れた「青雲の志」が生まれたのは自然の成り行きであり、札幌農学校のクラークの「青年よ大志を抱け」の精神が日本全国に広がったのも、当時の状況を考慮すればよく理解できる。

そして、日系人の海外雄飛もその精神の一環として見るができる。もちろん、当時の日本における貧困も背景にあったわけだが、そこで「鬱」的にならず、むしろ撃つて出る傾向が前面に出たのは、やはり、「生き延びよう」とする精神と深く関係する。ブラジルの精神保健専門家の話を聞くと、日系人口約150万人を擁するブラジルでは日系人も多彩であり、社会的に成功している人々も多い中で、社会の底辺で生活している人も少なくないという。しかし、面接調査を通じてよく理解できたことのひとつとして、メキシコやアルゼンチンでは、日系人口が比較的少なく、日系コミュニティとしてまとまりが強いこともあり、日系人全体の生活レベルや社会意識が、相対的に高い面がある。

面接の中でしばしば聞かれることは、日系人だから学校の成績が良くなければならないとか、日系人は社会的に現地で低く見られている職業についてはいけいない、などといった暗黙の前提のもとで、日系人は子ども時代を送り、成人し、社会に出ていく。アルゼンチンでは Prejuicio Positivo/良い意味での偏見と、それを呼んでいるとのことだが、日系の子どもたちはこの状況の中で成長していく。確かに、筆者の経験では、社会的に低く見られている職業についている日系人をメキシコやアルゼンチンでは見たことがない。この点は、明治期の「故郷に錦を飾る」という精神が、日系社会の理念として現代に伝えられてきていることと、関係していると思われる。日系社会の精神的まとまりが強いことから、その精神が代々伝えられ、維持されやすい面がある。高学歴志向が強いのもこの点を象徴しており、特にメキシコ日系社会では大学進学が一般的であり、この点、日本の大学進学率が50%を越えている状況よりはるかに上をいっているという言い方もできよう。メキシコやアルゼンチンでは国立大学

は基本的に無料であるため、日本で授業料が高額であり、また、社会的ステイタスも高い医学部に進学する人が多く、反面、近接領域である看護や福祉などの分野に進む人は皆無に近いという。ちなみに、このことは、看護福祉関係は現地では社会的にあまり高く見られていないことが関係している、とのコメントがあった。

こういった日系社会の理念や通念じたいは、すでに触れた、日系人の強い上昇志向の一環とみるができる。現地では大学入学じたいは容易であるが、卒業に至るのは難しい面があり、メキシコでは、一般的に見た場合、卒業できるのは、分野にもよるが、おおまかにいって入学者全体の3割程度ともいわれ、この状況からすれば、日系人子女の多くが「学士」の資格を得ている点を考えると、驚異的と言うこともできる。現地では、名刺に Licenciado(文学士) … として、氏名の前に「学士」の称号を付ける習慣があり、それほど社会的に価値のある学部卒業資格を、多くの日系子女が達成していることじたいが、日系人の強い上昇志向を物語っていると見るができる。

政治領域でも、ペルーのように日系大統領が誕生したケースは頂点としての例であるが、他の諸国でも、大臣になった人は何人もいる。また、経済分野で多くの日系人が成功を収めているのは日本でもよく知られている。基本的に日系社会は「成功志向」の強い社会であると言ってもいいが、特に面接調査においてこの傾向を明確に感じ取ることができた。

明治の「時代不安」が、当時の社会病理としての「神経質」と密接に関係し、一方で、生き延びようとする側面としての、成功志向、すなわち上昇志向を生み出したことは、むしろ、現代日本の状況に照らして見るとよく理解できる。現代の日本は明治時代と大きく異なり、「不安」のない時代といってもよい。特に、平成になってから、この傾向がしだいに顕著になってきた観がある。

ある意味で、「不足がない」というか、「ないものがない」のが現代日本だと思われる。言い換えれば、「不安」がないのである。2008年に実施された日本青少年研究所による中高校生の調査では、「自分はダメな人間だと思う」割合が、ずば抜けて高く、高校生で66%弱、中学生で56%との報告である。また、「よく疲れていると感じる」については、高校生が83%ほど、中学生が76%という結果であった。

若者の体力の低下などについての諸報告

や、「引きこもり」「うつ傾向」「自殺」の問題、こういった話題が多いのは、誰しも気になるところである。近年出版された、精神科医古荘純一氏による書籍のタイトルは「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」である。これは、児童精神科の現場からの報告ということであるが、筆者自身は、大学でスペイン語や心理学の授業を行ないつつ、学生相談室でカウンセリングに携わっており、つまり、一般の学生と相談学生と両方のグループに日常的に接しているが、やはり、意欲的な学生に出会うことが比較的少なくなっている、という印象を持っている。

上記の諸報告や、心理学、精神医学の専門家による指摘、また、筆者が外国の学生と接触してきた経験に照らしてみるに、やはり、現代日本の若者においては、全体として見た場合、相対的に「意欲」が低いという印象を持たざるをえない。そして、この「意欲」の低さ、言い換えれば、「志」の希薄さは、すでに触れた「不安のない時代」ということと密接に関係しているように思われる。明治時代と比べると現代の日本は、いわば「緊迫度」に欠けるという面があることは否めない。この、ある意味で「幸福な事態」が、反面、現代日本の問題だという言い方もできるのではないだろうか。「明治」は文字通り「激動」の時代だったわけだが、「平成」は「平静/Serenity」に通じる面がある。志の希薄化傾向は、日本の若者、個々人の責任とは言い切れない側面があることを、我々はまず認識する必要があり、その認識の上で、今後の対策を検討すべきだと考えられる。資料面で、本調査研究の主旨が裏付けられたので、今後の筆者の方向として、論文や図書として順次発表していく計画である。

5. 主な発表論文等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角川 雅樹 (TSUNOKAWA MASAKI)

東海大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：90188607